

〈存在の自由の平等〉へと探索する理路 ——「自我」・「所有」に向けたロールズとサンデルの視軸を介して——

西 口 正 文*

The Reasoning Which Searches for *Equality of Liberty of Existence*
: Through the Axis of Vision toward *the Self and the Property* by John Rawls
and Michael J. Sandel

Masafumi NISHIGUCHI

構成 《序》

《問題設定：〈能力主義という差別〉という視座》

《問いの場》

《意味まとめり [a]：ロールズ正義論における〈自我〉——概念規定する脈絡の揺れ》

[a]-1. “平等な自由”を志向する関係態

[a]-2. 「善」に優先する「正義」を担う“主体”

[a]-3. 「真価なき自我」と「無知のヴェール」のもとでの判断“主体”

[a]-4. 概念規定する脈絡の揺れ

《意味まとめり [β]：「自我」の存在規定への問い直し》

[β]-1. サンデルの提唱する間主観的〈自我〉

[β]-2. 井上達夫による「リベラリズムの鍛え直し」

《意味まとめり [γ]：〈所有〉の主体をめぐる争点——自我同一性ということの意味》

《意味まとめり [δ]：〈存在の自由の平等〉のための分配および固有性認識・感得》

《序》

2008年3月に発表した論稿¹⁾の末尾に、次のように記した。

「〈能力をめぐる正義考〉の歩みを辿るために、ひとまずは所有に焦点を合わせて〈正しさ〉とはどうあるべきかを——所有秩序の正しさとはどうあるべきかを——、最も土台となりそうなところから考えてみようとした。そのような意図から、所有秩序に関する主要な理説を、まずなによりもジョン・ロックに、次いでロバート・ノージックに、さらには現代リベラリズムにおける所有秩序観に——能力の所有という次元も含めたそれに——、視線を投じて考察した。これらの考察を承けて次なる段階として、本稿の問題関心にとって積極的に引き取ることのできる構想を外見上、指し示しているように感じられるものと

* 人間関係学部 人間関係学科

して（より正確には、積極的に引き取るに値する構想上の可能性契機を内蔵しているように予感されるものとして）、ジョン・ロールズによる構想に視軸を向けることにした。その構想をいかに引き取ればよいかを考える過程を経ることによって、正しさの・正しさについての探究を深めるためにはロールズの何を継承しどの点を拒斥すべきなのか、その輪郭だけは見えてきた。そうして、正しさの・正しさについての探究をロールズの限界と我々が捉えるところを越えて深めようとする行路を選び採ろうとする場合、耳を傾けるべき構案として立岩真也による〈（存在の）自由の平等〉構案を見出した。……………立岩による構案はポテンシャルに満ちているので、我々の関心に即して掘り起こすべき要素が多大に残されている。それら要素から汲み採れることを汲み採って議論展開を試みることは今後の課題として、本稿はひとまずここで筆を擱くことにする。」

本稿は上記の課題意識のもとに、〈存在の自由の平等〉なる卓抜な構案〔立岩 2004、さらに立岩 1997〕に結びつきを有する限りで、（直に立岩に即してというのではなくて、むしろ立岩からはひとたび離れて）マイケル・サンデルとジョン・ロールズそれぞれの主著に現われている〈自我〉概念および〈所有〉概念に即してその探索の理路について考えてみる。〈存在の自由の平等〉へと探索する理路にとっては、言うなれば、迂路を介するという作業に取り組んでみようとする。

《問題設定：〈能力主義という差別〉という視座》

本稿の問題設定を論じようとするにあたり、まず、基本的な視座およびそれに随伴する語義を明らかにしておこう。

「能力主義」は（そうであるとは通常はみなされがたいのだけれども）差別なのであって、ひとへの処遇のあり方として正しくはないこと・不当なことだ。このように問題化する理路の一端を提示しようとする。これが（それほど直接表立って議論されることはないのだけれども、本稿に底流する）基本的な視座である。このとき、謂う所の「能力主義」とは、第一に、各個体身体の発揮する“労働力”や“生産力”やの活動諸力にみてとれる優劣に応じて（＝正の相関を以って）それぞれの個体身体にとっての報酬としての受け取り度合いが決められる、という規範のあり方のことであり、第二に、上述の優劣に応じて（＝正の相関を以って）それぞれの個体身体が存在価値への序列づけ・格差づけがなされてよい、というよりもむしろ積極的に、序列づけ・格差づけがなされるのが正しく合理性を帯びる、とする規範的評価態度のことである。それからまた、謂う所の「差別」とは、当人に帰責されがたい事柄によってそのひとが不利に処遇されることを指し示す。

こうしていま提示した視座は、この社会における日常的意味感覚からそれに差し向けられがちな奇異なる印象にもかかわらず、まっとうな視座であるはずだ。それぞれの個体身体が発揮しうる活動諸力の優劣とは、それぞれの身体に——当の存在者に——帰責される事柄なのか、と問い詰めるならば、“然り（yes）”と答えられないこと、そのことが判明してくるのであるから²⁾。

《問いの場》

いまあるこの社会世界の秩序が構成されるにあたってその基軸をなしている原理と見てよい「能力主義」原理。この原理がどのようにして成り立っているのか、という点について分析的に検討しその妥当根拠を問うという、けっして数多いとはいえない先行研究から汲み取りうることを汲み取ったうえで考えてみて見出せるのは、まず第一に、能力主義の根拠づけが脆弱であることだ。第二にしかし、この能力主義を批判する側の言い分にとって、すなわち能力主義批判の主張にとって、分の悪い状況に——ひとの処遇や社会構成のあり方に関する規範的な理論の構築をめぐる抗争する場においてさえ分の悪い状況に——あることだ。こうした状況はなぜ続くのであろうか？

上記の問いに応答しようとするに際しては、ひとまず可能性のある答え方として大別すると二通りの答え方が想定される。ひとつの答え方として、能力主義に取って代わるべき正しさや妥当性を備えた、ひとの処遇原理・社会の構成原理を、いまだ示しえていないからだ、というもの。つまり、能力主義がたとえ十全に正当化されないとしても、それに取って代わるに足る正しさを（あるいは妥当性を、あるいは適切性を）備えた、ひとの処遇原理・社会の構成原理が見当たらないので、いまのところ現実化しうるものとしては最適なる原理として能力主義が通用することになるからだ、というもの。もうひとつの答え方として、正しさや妥当性がどこにあるかを示すことによってでは、件の状況を揺り動かし変動させるのに越えがたい障壁があるからだ、というもの。つまり、正しさや妥当性が能力主義の側にはなくて、別のところにあることを示したとしても、そのことのみによってでは、能力主義が支配力を揮う既存社会の秩序内で、また利害関係下で、生きる行為者に対しては人-人間関係の築き方や行為のあり方を変えさせるに足る影響力を充分には発揮しないからだ、というもの。

（それぞれについての厳密を旨とする本格的な検討と論及は、引き続き今後の課題にしたいが、）ここではいま挙げた二通りの答え方それぞれに対する見通しだけを述べておこう。まず、前者ではないだろう。次の④、⑤を併せてふまえるならば、そのように判断してよいだろうという見通しを得られるから。④：能力主義について考えるべきことを考えるならば、それが十全に正当化されないどころか、それが正しさや妥当性に悖理することを説明できる（そのことを、普遍的に共有しうる認識だとして示せる）。⑤：能力を発揮した成果を分かち合ったり、優劣として見て取れる能力の違いを（各人の）存在の値踏みに結びつけるのを峻拒したりして、能力主義でない関係のあり方をよりまともなあり方だとして——能力主義に取って代わる正しさや妥当性を備えたあり方だとして——受け容れる意識は、この社会に暮らしている人-人間にも垣間見られる。そのように言える行為-関係の局面を、われわれの暮らしの中に見つけ出すことができる。

上述のところから察せられるように、（先ほどの見通しによれば、）あの答え方二通りのうち、前者の可能性についてはそれを取り上げて吟味するに足る重みを持つわけではなく、むしろ後者の可能性を考え進めるという筋の方に主力を注げばよいことになる。しかしながら、各人への処遇や資源分配をめぐる規範的な議論の状況に目を向けるならば、前者の可能性を受け容れ助長するような視座が根強く残っているように思われる。

こうして本稿の底に流れる意図を言うならば、われわれの内に深く組み込まれた意識と

しての能力主義を、能力の相違にもかかわらず人間の自由な存在のための手段を平等化しようとする志向を拠り所にして、揺さぶり掘り崩すにはどうすればよいか、についての探索の糸口を掴み取ろうとすることでもある。

《意味まとめ [a] : ロールズ正義論における〈自我〉——概念規定する脈絡の揺れ》

[a]-1. “平等な自由” を志向する関係態

表層の事柄から語り起こそう。“自由世界”と称されるこんにちの先進的(?)社会世界に生きる人々の意識に深く浸透することを以て、社会的に支配的な思惟傾向となっているのが、リベラリズムであるとする見方。その見方は、大きな見当違いをしているわけではないだろう。そのリベラリズムが個人の自律性をなによりも重要視する、という見方。これも明らかな誤りとは言えない見方だろう。この見方に関連してここで気に掛けてよいと思われるのが、個人の自律性に重きを置くがゆえに、結果としては（——社会文化的構造の現相と相俟って、というほどのことをより丁寧には、補うべきところなのだろうが）人々の間に埋めがたい価値意識の対立や混乱や共通価値の消失状況がもたらされ、他面ではまた、政治に対する無関心やシニシズムが蔓延するに到った、とする捉え方である。日常生活感覚に訴える力を有するだけに、“リベラリズムの問題点”として共感を得やすいこの捉え方は、現代リベラリズムの思惟地平を問題化する上で、はたして的を射えているのだろうか。一口に現代リベラリズムといっても、論者によって論点や論調の多様性が現われるので、どのように対象化すればよいのかについては、慎重を要するところなのだが、われわれとしてはジョン・ロールズの主張を——現代リベラリズムの到達点のひとつとして看過するわけにはいかぬ主張を——対象にして、特にその自我把握のしかたを取り挙げることにはしたい。

ジョン・ロールズは『正義論』第二部「制度論」中の一つの章を「平等な自由」と題して、彼のいわゆる「正義の諸原理」のとりわけ法制度面での基本構造に照準することによって諸原理に関する内容説明に充てている。その輪郭をなぞるかたちで描くとすると、次のようになるだろう。身体の自由や精神活動の自由など諸種の自由はすべての市民に平等に保障されるわけであるが、その自由を実際にいかに生かして価値あらしめるかは、それぞれのひとのなすところであり、各人がその責任を負わなければならないこととなる³⁾。ここに直ちに付け加えるべきことは、ロールズの所説においては、正義の第二原理に示されてくる「格差原理」によって、最も恵まれない者にとって得られる便益を最大化しようとする配慮も払われていることだ。ただ、我々としてはここで、得られる便益を最大化するとはいえ、その配慮を生み起こす発想の基層において、第一次的には格差を設けるのを肯認していること、肯認した上での第二次的な所産としての配慮なのであること、これを忘れてはならないだろう。

[a]-2. 「善」に優先する「正義」を担う“主体”

ロールズ流リベラリズムは功利主義倫理学への痛烈な批判意識をもって提起されている点、そのことをあらためて想起しておくべきだろう。各人の追求する善が——それぞれの

求める生の目的や幸福や資源獲得などが——容易には調和しがたい状況の中で、所与の社会の側から見た最大量の善がもたらされるように、資源の配分を（幸福もしくは目的の実現に結びつく媒体の配分を）行なうことを以って、解とする、すなわち、“最大多数の最大幸福”を解とする、という思想的前提。それが功利主義倫理学の核をなす。それを断固として拒斥する思想という意味合いを込めて、ロールズ流リベラリズムは各人にとっての善き生を自由に追求できることを重要視する。そのためには、基礎づけが必要となる。ここに謂う所の基礎づけにあたるのが、「善」に優先する「正義」である。「正義」とは、各人にとっての「善」の自由な追求が相剋様相を来たさずに済むような社会的環境設定（各人の志向を妥当なるものに制御する構制をも含む）のことだ、と理解することができよう。典型的にはロールズ謂う所の「正義の原理」に結晶化するわけだが、その内容にここでは論及するを要しない。むしろここで大切になるのは、「善」に優先する「正義」を担う“主体”であるための条件とはどうであるか、という点だ。端的に言って「正義」を担う主体とは、社会構成上の契約原理を見出すためにロールズが提示するところの原初状態における契約“主体”だ。それゆえそれは、所定の経験的世界の中で根底から厚く位置づけられている自我では、まったくない。そうではなくて、作為的に構想され制御されるべき社会構造を構築していくための基盤となる環境に——「正義の環境」に——身を置くことに、まずは同意する“主体”＝自我である。そうして次に、そのような基盤となる環境のもとで自由で平等であるべき各人が、互いに他者に対しては無関心な意識態を以って、自らの利害得失関係を合理的に考慮し評価するための判断基準に同意することができる、そのような“主体”＝自我である。結晶化されてある「正義の原理」の基調は、こういう条件のもとにある“主体”によって担われるわけだ。

〔a〕-3. 「真価なき自我」と「無知のヴェール」のもとでの判断“主体”

ロールズは『正義論』中の特に「原初状態」について論及する議論展開の中で幾度も、自分に備わっているかに外見上は見える能力や才能や努力する性格などに真に値するものは誰もいない、ということ力を説している。かようなロールズの知見はマイケル・サンデルによつて的確にも、「真価なき自我」と呼ばれている⁴⁾。所有と自我とその真価の絡まりあいという位相から自我へと差し向けるこのような視線は含蓄に富んでおり、重要視されるべきであろう。経験的世界の現相ではしかしながら、「真価なき自我」という認識をもたらす重要な視軸は意識の暗部に封じ込められるのであって、各人の処遇にかかわる関係秩序形成にあたって、個体ごとの値踏みが不可避の要請というかたちをとってなされてあり、なされ続けている。

われわれがしかし、この「真価なき自我」への覚識に到るならば、社会構造構築のあり方はその基盤から再考されるべきだと気づくことになるはずである。この気づきを承けてその基盤からの社会構築に踏み出すに際しては、原初状態での契約主体に「無知のヴェール」が被せられてあったこと、このことの意味の解し方が重要になってくる。そこで契約主体は、前項（〔a〕-2）で述べたように、「善」に優先する「正義」を担う“主体”であり、他者への無関心さを以っていわば利己性をも帯びつつ、合理的な判断基準を保持しようとする“主体”＝自我である。ここでしかしこだわって考えてみる必要があるのは、「善」に優先する「正義」を担う“主体”として利己的で合理的な個人という判断主体の面を強

調することによってでは、「正義の原理」に結実する社会構造構築の理念的骨格にすべての成員が——基盤からの社会構築に踏み出した人たちすべてが——同意するわけではないだろう、という点だ。正義原理に同意して（当の原理に依拠した）新たな社会構造構築に参加するには、件の「真価なき自我」という覚識に支えられて、しかも対他関係の築き方においても善き生の追求主体としての自由を平等に感得し獲得することに向かおうとする、そのような志向が要る。こうした志向の構えを身につけるに及んだ自我はそのあり方において、前項では前面に挙げられたところの、合理的で利己的な個我としての意識や行為の担い手とは、異質な要素を帯びようになっている。

〔a〕-4. 概念規定する脈絡の揺れ

先行する二つの項（〔a〕-2, 〔a〕-3）での論及から推察されるように、ロールズ正義論において示されている、正義を担う“主体（自我）”からは、それが概念規定されるに際して二様の脈絡を見出すことができる。ひとつは、（根底から厚く位置づけられそのつどの顕在的欲求や利得に埋没した自我のあり方に囚われることの難点を承知しながらも、）現実生きる人間の経験的世界における位置づけ・意味志向から離れずに「正義の環境」を設定し、そうしていわば自明のものとして“資源の穏やかな稀少性”や“互いに無関心な合理的個人としての存在”という条件を持ち出して、その条件下で自我を規定する、という脈絡である。もうひとつは、自由で平等な各人の関係として社会秩序の形成を考案するにあたって、「無知のヴェール」に蔽われたその下で、しかも「真価なき自我」なる覚識を深く刻み込んで存立することになるはずの自我、という脈絡である。前者の脈絡が、経験的世界に生きる人間にとって——合理的個人“主体（自我）”というあり方へと傾斜しがちな存在者にとって——適正さを保持できるように、とする意向を前面に押し出して出来しているのに比して、後者の脈絡は、経験的世界の制約からできるだけ遠くへと離れたところで、言うなれば超越論的主体としての性格を帯びて正義原理を担う自我のあり方、これを規定しようとする意向を前面に押し出して出来するそれであろう。つまりこうだ。ロールズ正義論における自我には、経験的世界での適切性に即そうとする脈絡と超越論的可想界での妥当性に即そうとする脈絡という二様の脈絡が見出され、正義原理導出の過程でこの二様の脈絡には動揺を指摘しうるのだ。このことは、別言すれば、「原初状態」についての論及が整合のとれていない複層性を帯びているということでもある。

《意味まとめり 〔β〕：「自我」の存在規定への問い直し》

〔β〕-1. サンドルの提唱する間主観的〈自我〉

前節（〔a〕）での考察を通してわれわれは、自我概念に見出される争点を軸にして、ロールズ流リベラリズムによる正義構想に向けて、その構想上の混乱もしくは不首尾を看取することができた。自我概念に見出される争点とは、経験論的自我と超越論的自我とのいずれが、《正義構想を導き出すにあたっての要件をなす》道徳主体のあり方として、適切であるのか、という点に集約できるものだといえよう。いまここに挙げた争点の示し方に留まっているかぎりには、しかし、正義構想の上での不首尾を克服しようとする道筋を探りたい。経験的世界への内在と超越とのつながりを整合的に問えないからだ。首尾よく正義

の構想をなす方途を開くには、上記のような争点の示し方を転じて、次のように示すのが適切であろう。すなわち、「個体還元論による自我としての道德主体」と「間主観的（＝間柄的）構成論による自我としての道德主体」とのいずれが、正義構想の要件をなす道德主体のあり方として妥当性をもつか、として争点を示す方法だ⁵⁾。両者の相違について補うならば、前者（＝「個体還元論による自我としての道德主体」）が、個人主義的合理性を帯びた自由意思の発現を基軸にする道德主体にとって好都合な枠組みという意味を込めているのに対して、後者（＝「間主観的構成論による自我としての道德主体」）は、間主観的に構成される解釈や反省の位相を組み込んで、換言すれば関係の第一次性に立つ解釈や反省の位相を組み込んで、意思を組み立てることを基軸にする道德主体にとって好都合な枠組みという意味を込めている。

前節最終項（[a]-4）で見出しえた争点を転じるかたちでいましたが示した争点、その対立構図をなす二者のうちの前者に繋留されて脱け出せなかったところから、ロールズによる正義構想の不首尾がもたらされているのだ。この点について、若干の論及を試みてみよう。

正義の構想にとって（他のいかなることをさておいても第一に）要件をなすこととして考えなければならぬのが、道德的自我＝主体のあり方だ。そのあり方としては、経験的世界に位置づけられつつ——その通用的な意味枠＝規範に囚われつつ——離脱すること、そのことがまさに求められる。ロールズにあってはしかしながら、部分的に打ち出されるその卓抜な見解との首尾一貫性をまったく欠いて、通用的な規範に妥協する「正義の環境」および道德主体が提示されている。つまり、謂う所の〈離脱〉が望まれがたい構想になり終わっている。自我の自由意思自体への解釈的反省の作動が入り込む契機を基本的に欠いているのだ。ロールズのこの弱点に対比して、マイケル・サンデルが提起する「間主観的自我」には、自己解釈的で自省的な契機が組み入れられることになる〔マイケル・サンデル、1982→1999：第一章〕。

サンデルにあっては、自我へのアプローチが根底において〈関係の第一次性〉に依拠するという視座に立つものとなっている。その視座からは、凝固し惰性態化した＝物象化した関係としての、経験的世界での間主観的＝共同主観的自我のありように、然るべき距離を採ることが可能となる。そのような立論構制を地盤とするがゆえに、サンデルは自我なる概念を、そこに自己反省的な解釈性が組み込まれるべきものとして、説明することになるわけである。こうして、関係の動態において間主観的に構成される道德主体のあり方は、“権利主体としての個体＝自我”——ロールズ流リベラリズムにおいて究極の単位（始源）として想定された道德主体のあり方——に依拠する正義構想の限界を乗り越えるための可能性条件を獲得している。そのように見て誤りはないだろう。

自己反省的な解釈性を帯びてあるものとして説明されるサンデル流の「間主観的自我」は、一般にリベラリズムにとっては埋めがたい他我（〈他者性〉）との距離を埋める方途を開く。自省的解釈性に立つ意味志向が互いに共通の善を見出しえた場合、そこにおいては拡大する間主観的な自我が生み出される。共通の善への意味志向を媒介にして自我の間主観的な拡大をもたらす、というこの論理は、超越論的自我としての道德主体へと到り着く理路と、通底するのではないだろうか。

〔β〕-2. 井上達夫による「リベラリズムの鍛え直し」

ロールズのような高度に洗練されたリベラリズムにおいてさえ、その「自我」観念（——「自我」という存在規定）には難点がある。そのように問われるべき難点を見出し、それを克服しようとする理説が、井上達夫によって提示されている〔井上達夫 1999〕。その克服の方向は、広くはコミュニタリアンと称されるひと達の中でも特に、マイケル・J・サンデルの所説を、（全面的に受け容れるのではなくて）部分的に受容して、議論の基調としては「正義の基底性」を——「正義」と「善の構想・追求」との区別において正義に基底的な（より上位の）制約力があるとする捉え方を——保持しようとするものである。

井上によるこの理説は、マイケル・サンデルによるリベラリズム批判に触発されつつも、コミュニタリアン流の共同体としての共通善の優位化による正義構想に揺さぶられることなく、「正義の基底性」という構想にあくまで基づいて、公共性の構築へと迫り得る質の、懐の深いリベラリズムを樹立しようとする果敢な試みだと、一応のところは評すことができよう。特に、他者性との対話を含み込む公共哲学として、“遅しきリベラリズム”を築き上げようとする構えは注目に値する。とはいえ、筆者の見るところ、リベラリズムにまつわる難点が、就中、立岩真也が〈存在の自由の平等〉構案を提起することを以って超克しようとしている難点が、解かれ克服され得ているか、と問うならば、疑問符を付さなければならぬように思われる。

ところで、サンデルによるリベラリズム批判の論点のひとつは、自我という存在に関するリベラリズムの捉え方に妥当性が欠けているということだ。自我がその据え置かれた環境状況の中で存在被拘束性を帯びること、そのこと自体をリベラリズムが知らないわけではない。自我の存在被拘束性を認識しながらも、それが自我にとって外在する拘束力によってもたらされるとみなすところに、したがって、身体がその自律性・自立性を発揮できない拘束された状況に置かれるとみなすところに、リベラリズムにおける自我の存在被拘束性に対する基本的な問題意識が立ち上がる。換言すれば、自我それ自体は“負荷なき自我”と呼びうるものであって、そのあり方を拘束する要因が外側から付着するがゆえに存在拘束性が生起する。サンデルはおよそこのようにリベラリズムにおける自我観の短見を押えた上で、次のように洞察する。謂う所の存在被拘束性とは、自我にとってもっぱら外在する拘束力によって生じるのではなくて、自我とそれを取り巻く状況に対する自我自身の解釈を通していわば内側からもたらされ内在しているのだと〔マイケル・サンデル、1982→1999：第一章〕。

自我の存在被拘束性というものがいわばその内側から内在的にもたらされているのだとしたら、そのありように向けての反省や批判の契機が生起し作動することは可能なのだろうか？ 起こりうるこの疑問に対してサンデルは次のように応答するだろう。自我という存在は“根底から位置づけられた自我”としてあるわけではなくて、環境状況の中で“厚く位置づけられた自我”でありつつ、その位置づけられ方・意味規定のなされ方を反省し批判的に吟味するに及ぶ契機が潜在するのであると。“厚く位置づけられた自我”にあってはむしろ、その存在拘束力の強さをその問題化への向きを採って覚識すればこそ、自らに向けての反省的解釈や批判的問い直しが出来る。無論そのことは自然に生じるわけではなくて、自我の内属する身体がなんらかの関係態を採るという条件下において出来ることであるだろう〔マイケル・サンデル、1982→1999：第二章〕。

自我という存在の捉え方に関するサンデルによるこうしたロールズ批判を、重要な点だとして井上達夫は基本的には肯認している。(ロールズを標的にしてサンデルが衝いてきたところの)従前のリベラリズムに見られる自我観念を乗り越えるべく、井上は「自己解釈的存在」として自我のあり方を捉え直そうとする。状況の中での存在被拘束性に向けての反省や批判の契機、これが組み込まれ作動しうることを示すことができるような概念として、「自己解釈的存在」——「自己反省的存在」と言い換えることもできよう——を提示することになったわけだ。自我という存在のありように対して、身体が自己解釈に(自己反省に)向かい立とうとするに当たってはしかし、自己解釈的意識化の対象を指定するに足るだけの条件が備わらねばならない。その条件として井上が示すのが、身体にとっての“自我同一性”を認知すること(意識内部に把持すること)である。それぞれの身体はその位置づけられた環境状況の中で善き生を求めつつ、それなりの同型性を帯びた生き方を採ることになるのだとしたら、それなりの同型性が謂う所の“自我同一性”として当の身体に意識されるに及び、それに伴って自己解釈(自己反省)という作動を生起せしめることになるだろう[井上達夫 1999: 第五章, 特に 163-164 頁]。

才気に満ちた井上の理説に納得する部分をいくつも感じながらも、筆者にとってなお残るのは、正義の善に対する基底性をあくまでも判断の拠り所に据えること、そのことが妥当であると言えるのか否か、という基本的な疑問である。善き生の追求目標に関与することが、個体身体にとっての普遍的自由の——実現を求める価値内実のあり方や道徳的方向づけのあり方から“中立”であらんがために《各身体の意味志向と行為遂行力に委ねんがために》、その意味において、伝統的なリベラリズムの意味地平にとどまる限りは“自由な”枠組みとしての普遍的自由の——保障を妨げることになる、と見るべきなのか。それとも、自己解釈的存在としての自我を宿す身体は、善き生という価値内実のあり方としての追求目標——価値的理想性を帯びていると主張しうるような道徳の構想——を欠いては生きてはたらくことがないのか。前者の立場を井上は採るわけだ[井上達夫 1999: 175-179]が、後者を斥けるべき論拠が明確に示されたわけでもない。

翻って、ここで対象としている井上の論立てのありようから、存在の自由・平等をめぐる推察されるのは、どういう規範のあり方なのだろうか。機会の平等による“公正なる”自由競争、および、そのことの顕著な矛盾と綻び・皺寄せ箇所に向けては事後的に救済措置を講じること、というこの社会に既にある意味では現実のものとなっている規範のあり方に収まって行くことはない、と判断しうるための識別点が果たして見出せるのであろうか。私的所有という規範のもとでの貨幣の運動への、商品交換を基軸にする市場(原理)への、問題意識という点では、希薄であり、その曖昧さに納得しがたいものを感じざるを得ないのである。

《意味まとめ [γ]: 〈所有〉の主体をめぐる争点——自我同一性ということの意味》

ロールズとサンデルとの対比は、正義をめぐる考察を深める上で、意義あることだということ。そのことは、これまでに見てきた自我概念に関する対比を以って既によく感じ取られるところだ。ここで我々にとって——正義をめぐる探究を本格的に始めたいと願ってこの二人の巨大な先達の思索の跡に立ち向かおうとしている我々にとって——意義

深いと思われるのが、両者の対比をさらに進めて、所有主体のあり方と「自我同一性」との関連づけ方という観点から、考えてみることである。

ロールズ流リベラリズムにおいては「善の稀薄」ということが重要な点だとして強調されている〔ジョン・ロールズ、1971→1979：第一章「公正としての正義」、第七章「合理性としての善性」特に309-312頁〕。そのことは実は、経験的世界での所有の具象相に囚われない——所有にかかわっては抽象性を保持し続ける——自我への要請を、含意している。そのような要請が支配的な力を有するところにおいては、法理念上、善を自由に追求する機会が備給される場合にこそ——善き生の追求主体として振舞うための門戸は開かれているという意味で自由のための枠組みが保障されている場合にこそ——、自我同一性を認めることができ、感得することもできる、とする。“真価なき自我”という捉え方からも、それぞれの善き生への門戸は機会平等に開かれ、そのような条件下で善き生を自由に・それなりの固有性をもって追求していくことができるというかぎりにおいて、それぞれの個人は対等に・格差づけられることなく自我同一性を持つに到るのだという主張を、(論理的にはやや苦しい脈絡でありながらも、) なさしめる。

上記のようなロールズの所論に対する批判的意味を込めてサンデルは、次のように述べる。具象的な所有と、すなわち善の追求・獲得についての具象相と、関連づけることを以ってはじめて、自我同一性を、その空虚ならざる中身を有するあり方において、認知することができ感得できもする。善としての追求対象が変動しても、サンデルの提起する間主観的な解釈的自我にとって、同一性がそのつど崩れ去るわけではなく、一貫して保持されうる。このように述べるのだ〔マイケル・サンデル、1998→1999：第一章〕。ここでは、具体的な所有対象が《それ自体はたとえ変動するにしても》自我にとっての善き生の追求にあたって必要不可欠なるものとして特定されるに及んでいるのであり、《この際に自我の方も諸関係の結節態として変動を免れはしないにせよ》自我との関係において所有対象が特定される意味脈絡の同一性を覚識できるかぎりでは、それが所有主体の自我同一性として認知されうるだろう。ロールズ流リベラリズムにおける自我同一性に比すれば、少しだけ見出し易くなった自我同一性のあり方だ、と評せなくもない。

《意味まとめ [α] : 〈存在の自由の平等〉のための分配および固有性認識・感得》

以上の行論を踏まえて、ここで暫定的なまとめを(小括を)試みておこう。

第一に、道徳主体たりうるための自我の描き出し方をめぐっての中間小括としては、ロールズとサンデル、それぞれの自我に向けての説明的描出方略を省みるならば、相対的に見たときのサンデルの長所を認めることができよう。[β]-2の項で論及したように、井上達夫によっても従前のリベラリズムに見られた「自我」把握の反省性の弱さを乗り越えるべく、サンデルの自我概念の提示を生かそうとする試みが現れたことを、この意味脈絡においてよく捉えることができるであろう。

第二に、自我同一性と所有との関連づけ方をめぐっての中間小括について。ロールズの場合、自我の主体たる地位(支配性)を揺るがさずにその自同性を把握しようとするから、所有は自我同一性にとっては余計なこと——範疇を異にする事柄——である。サンデルの場合には、所与性や偶有性に蔽われ尽くした所有のありようではなくて、間主観的で自己

解釈的な自我もしくは自我連合による反省的な練り直しを経て、協同的・共同体的に“所有-自我同一性”関連が結像してくる。

第三に、〈真価なき自我〉という洞察を基盤に据えること（これはロールズもサンデルもどちらも同意すること）。そのうえで、それぞれの個体身体に偶有的に付着せる諸々の徴表・力・人的もしくは物的な関与系を引き受けつつ、自らの善き生を追求することを志向して、対他関係づくりを、そしてまた間主観的意味構成を、反省的に試み続けること。それぞれの存在の固有性認識・感得を社会制度構築の目標として明瞭に掲げ続けること。こうしたことの大切さに気づくことができる。

第四に、共通する・共通化しうる基礎的生活手段（資源）を各人に平等分配すること。共通化しえない生活手段（資源）は、富と時間の一定の枠組み内で、必要に応じた提供を行なうこと。サンデル流の考え方に沿って、善い意味での自我同一性を自尊心の構成素として保持するための所有を（かような具象相を備えたところの善き生の自由な追求媒体・手段を）保障すること、このことの大切さに気づくことができるから。

翻って、各人の〈存在の自由の平等〉とは、それぞれの固有性において尊厳を確保せんとすることだ。このことは経験的世界での未来の事柄である。「所有」といい「自我同一性」ということも、さしあたり経験的世界での認識に——未来の妥当なる認識およびあり方（存在様相）に——重きが置かれる事柄である。これらの事柄を正義の領分へと持ち来たすための条件としては、経験的世界の過去から現在に到る意味志向の惰性から徹底して離脱すべく自我をば超越論的に想定することによって、分配をはじめとする規範のあり方を、社会構造を、紡ぎ出さなければならないであろう。これを本稿におけるひとまずの結びとしておこう。

註

- 1) 「立岩真也による〈自由の平等〉構案の孕む触発力」（『梶山女学園大学研究論集』第39号・社会科学篇）
- 2) このことに関して筆者が考察してきたことをまとめたかたちで記述した論稿として、[西口 2006]、[西口 2007]を参照されたい。
- 3) 本文での当該箇所とその脈絡に深くかかわることとして、ロールズが「自由」と「自由の価値」を次のようにして区別すべきだと述べているのを、記しておこう。すなわち、「自由とは、平等な市民権のもつ自由の完全な体系によって提示される。他方、人々や集団にとっての自由の価値は、体系の定める枠組の中で、自分の目的を増進する彼らの力量に依存する。」[ジョン・ロールズ、1971→1979：159]
- 4) ロールズの知見については、[ジョン・ロールズ 1971→1979：第三章、第五章（の中の§48）]を参照。かようなロールズの知見を、マイケル・サンデルは的確にも「真価なき自我」と呼んで考察を加えている。マイケル・サンデル [1982→1999：第二章、特に178頁・190頁]を参照。
- 5) ロールズによる自我概念への反論という脈絡において、「間主観的自我」（および「内主観的自我」）のあり方を提起することの重要性を、マイケル・サンデルは言及している [サンデル 1982→1999：136-143]。

文 献

- 井上達夫 1999 『他者への自由』創文社
- 西口正文 2006 「不平等再生産と教育をめぐる問題構制」(椋山女学園大学『人間関係学研究』第
四号)
- 西口正文 2007 「〈能力をめぐる正義〉に関する社会哲学的探究」(『椋山女学園大学研究論集』第
38号 社会科学篇)
- Rawls, John 1971, *A Theory of Justice*, Oxford University Press
(ジョン・ロールズ 1971 (→1979) (矢島欽次監訳) 『正義論』紀伊國屋書店)
- Sandel, Michael 1982 (second edition: 1998), *Liberalism and the Limits of Justice*, Cambridge
University Press
(マイケル・サンデル 1982 (→1999) (菊池理夫訳) 『自由主義と正義の限界』(第二版) 三嶺
書房)
- 立岩真也 1997 『私的所有論』勁草書房
- 立岩真也 2004 『自由の平等——簡単に別な姿の世界——』岩波書店